

第7章

職員手記

1 各所属職員の手記

1 各所属職員の手記

「当たり前前に感謝」



中央消防署消防第1課
救急室
消防副士長

蕨野 沙紀

大雨による球磨川の決壊で多くの被害をもたらした7月4日未明から朝にかけて、私は救急隊員として勤務していた。

出勤時の7月4日の朝、数日前から雨が降り続いており、この先も更に雨脚は強くなるという予報をテレビで見っていた私は夜になっただこまで球磨川の水位が上がるのだろう。大丈夫かな。と思いながら出勤したのを覚えているが、実際にはそこまで深刻に考えていなかったのが正直なところである。

予報通り1日中強い雨が降り続いていた。夕方過ぎ、携帯にはいくつか緊急速報メールが入り、けたたましい音が鳴るたびにこれはいつもと様子が違うと感じた。

日付が変わったあたりから恐怖を感じるような雨に変わり、大雨特別警報が発表された。全職員の召集がなされ、中央消防署内は今までにない異様な雰囲気だった。

朝6時頃、車同士の交通事故へ出動した。既にいつも通れる道が冠水し通れなくなっており、通れる道は避難する住民の車で渋滞が発生している状況で、辺り一面がいつも見る光景ではなくなっていた。異常だと感じた。それでも雨は止むどころか強くなる一方だった。遠回りしながらもどうにか救急病院まで搬送した。病院収容後、中央消防署までの帰署途中、「避難中に流された1名の要救助者がいる。」という情報が無線で入った。偶然にもその現場の近くに

いたためそのまま現場へ向かうと、女性が腰辺りまで水に浸り今にも流されそうな状態であった。すぐに救出し病院へ搬送するが、搬送経路は全て冠水しており、搬送というよりも前後左右から迫ってくる濁流から逃げている状態であった。すでに冠水し立ち往生している車もあり、見るもの全てがテレビで見るような光景で、驚きと困惑と恐怖を感じた。



(搬送途上の道路状況)

唯一通れた道を通り、病院まで到着したものの病院の患者搬入口付近は腰辺りまで水位が上がっており近寄れない状態であった。違う搬入口から搬入することとなったが腰辺りまで来ている水の流れは早く、流されないようにストレッチャーに必死にしがみついている状態で、正直自分の身を守るので精一杯だった。

病院収容後、中央消防署へ帰ろうとするが周囲一面冠水し、身動きがとれない状況となってしまった。無線は途切れ、携帯の電波も入らず、他の隊の動きや中央署の状況などが何も分からない状態で数時間待機することとなった。不安と疲労で押しつぶされそうだった。

水位が下がり橋が渡れるようになったのは数時間後だった。やっと中央消防署へ帰れるようになったが、目の前の世界は私の知っている人吉の街では無くなっていた。全壊している建物や水没している車両。泥とゴミの世界が広がっていた。中央消防署へ帰り着いた夕方頃、ここでも目を疑うような光景ばかりだった。職員

の自家用車はほとんど水没し、庁舎内も壁には浸水の跡が付いており、ドブのような臭いが漂っていた。いつもと違いすぎる現実に悲しくて言葉も出なかった。



(水が引いた後の職員駐車場)

泥水で見えなくなっている溝に足を取られ、流されそうになった時や、腰辺りまで浸かりながらストレッチャーを押している時、本当に恐怖を感じた。今考えると自分が大きな怪我をしてもおかしくない状況が何度もあった。いかなる状況でも自分の身は自分で守るという事を常に忘れず活動しなければならなかった。

何十時間も出動し続ける中で、飲料水や食料、着替え等の災害に対する備えの大切さも身を持って実感した。自分の防災に対する意識の足りなさに深く反省し、防災意識を高めることの重要性を再確認した。

近年、想定を越えた自然災害が多発しており、今後も更に増加していくと言われている。今回の様な災害が毎年起きてもおかしくはないと思った。常備消防として常に備え、想定外な事が起きたとしても冷静に対応できる力を身に付けていきたい。



(庁舎前に集結した車両)

多くの犠牲のもと、今があることを決して忘れてはいけないと強く思った。この経験をこれからの業務にも生かし、当たり前の日常に感謝していきたい。

1 各所属職員の手記

「忘れられない日」



中央消防署消防第1課
予防調査室
消防士長

宮本 努

梅雨の時期が到来し、ニュースでは各地での災害が報道されている。今年もあまり雨が降らずに各地で災害が起きないことを願っていたそんな時でした。

令和2年7月3日から4日にかけて発生した線状降水帯により、各地に被害をもたらした「令和2年7月豪雨災害」。今まで経験したことがないような雨量により、人吉球磨管内にも甚大な被害をもたらした。

7月3日から4日にかけての1当務、災害が起きた7月4日、私は勤務していた。天気予報の速報では、大雨に警戒。まだ雨が降るのか、洪水が起きなければいいけれど。いつもと変わらない気持ちだった。災害が起きない事を祈りつつ勤務を継続していたが、大雨による警戒のため夜中に出向することになった。出向して間もなく何かがいつもと違った。いつも通る道が川のようにになっていた。降り続く雨の影響で水がはけきれず、山からは山水が大量に流れ出し、川の水は行き場を無くし至る所で道路が冠水していた。警戒中に目に映るすべてが今まで見たことがない光景だった。そんな中、各所で異変が起き始めていた。各所での異常を知らせるように鳴り止まない119番通報、無情にも降り続ける雨。そんな最中での出動。現場では先行していた救助機動部隊が活動中、住宅へのアプローチが浸水により困難、ボートが要請され、消防車両にてボートを積載し現場へと向かっ

た。現場には要救助者が3名。浸水により身動きがとれない状態。ボートを搬送し救助機動部隊による救助、3名をボートに乗せている間にも周囲の状況は浸水により変わっていった。隊長の指示により、車両をより高い位置に移動させた直後だった。上流から茶色の水が流れてきた。後から分かったことだが、この時堤防の決壊等により川の水が越水していたのだ。見る見るうちに水量が増えていく。隊長の指示で現場にいた隊員と要救助者全員が近くの集落センターの屋根の上に3連梯子を使用して登った。分刻みで上がる水位、あっという間に周りの風景は変わり果てていた。



(人吉市中神町大柿)

さっきまで歩いていた道路を含め、すべてが飲み込まれて川になっていた。身動きも取れないままに周囲は茶色の濁流に囲まれ、自分達が乗ってきた消防車両もアンテナが僅かに見えるぐらい。流れていく木々、倒れていく電柱、時間とともに周囲の家も流され始め、集落センターの屋根の横樋まで水位は上がっていた。呆然と立ち尽くすことしかできない中、雨が止み水位の上昇も止まった。水位が下がりきるのを待ち、数時間ぶり地に足を付けることができた。付近の住宅に住民がいないか、皆で徒歩にて確認に向かい、垂直避難等で無事であった住民が数名いた。最初の要救助者も含めてすべての避難住民は、自衛隊のヘリにて安全な場所に避難できることとなり、ヘリ搭乗完了後に自分達は消防署へ帰署した。



(自衛隊ヘリでの救助)

帰路もそうであったが、消防署自体も被災し風景が変わっていた。庁舎内は泥まみれ、少し低い位置にある職員駐車場の職員個人車両は全滅、各現場に出動していた何台もの消防車両も被災していた。緊急車両が被災して激減したことで通常の業務もままならない中、庁舎の復旧が急務であった。ようやく署へと帰り着いたのも束の間、各現場へと出動していた職員も含め、全職員での庁舎復旧作業が始まった。日を跨ぐ直前であったが、その日の作業は一旦中止となり、直後に畳の上に横になったが、疲弊していたからなのか瞬時に泥のように眠ったのを覚えている。次の日も1日中庁舎復旧作業となり、個人車両も帰路も被災していることからその日も自宅へと帰ることはできなかった。次の日は通常であれば勤務日であるが、通常の勤務体制をとることはできない。そんな中、緊急消防援助隊による応援隊が続々と集結。緊急出動に対しての応援をしていただくこととなった。1当務を終えた明るる日、帰路につけることとなった。しかし、いつも通る国道が無残にも決壊して消失している箇所もあり、車両での帰宅は無理であった。後輩職員が途中まで車両で送ってくれ、そこからは徒歩にて帰路についた。衝撃的だったのが、国道上の大きなカーブがあった場所だった。その周囲には飲食店や空地、立木等があったのだが、道路も含めてすべてが無くなって歩いて通ることさえも出来なくなっていた。迂回して自宅直前の橋を渡る時も、橋脚と道路のみで辛うじて渡ることができるといった状態であった。やっと自宅へと帰り

着き、家族は皆避難していると聞いた。自宅内を見てみると、1階はすべて浸水し、汚泥やゴミが入り込み、壁には穴が空いていた。言葉が出なかった。その後、避難所へと足を運んだ。家族と対面した瞬間、自然と涙が流れた。皆の無事を確認したからなのか、やっと現実に戻り緊張が解けたからなのか。妻と息子が最初にかけてくれた言葉は今でも忘れない。「今日は7月7日の七夕だから、パパに会えますようにってお願いしてたんだっ。」



(自宅の状況)

被災当時、まだ生後3ヶ月であった娘がいたこともあり、私以外は避難施設にお世話になることができた。私自身は、自宅の2階が辛うじて無事であったため、2階を使用して生活をしながら地区の復旧活動を行った。地区の班長という立場もあったが、まずもって人手が足らなかった。私の次に年齢が若いのが父親であった。地区の復旧活動の合間に自宅の清掃を行いながらも、勤務日には署へと向かうのだが、いつも通る道は被災により使用できないため、山道を使って迂回し、片道1時間半のルートで通勤するしか方法はなかった。普段であれば往復30分程度の買い出しも、往復3時間以上かけて行かなければならない。そんな日が何日も続いた。復旧作業も庁舎、自宅、地区の三つ巴となり、自然と体重は減り、食料の確保、中でも水の大切さを改めて知らされた。



(自宅の状況)

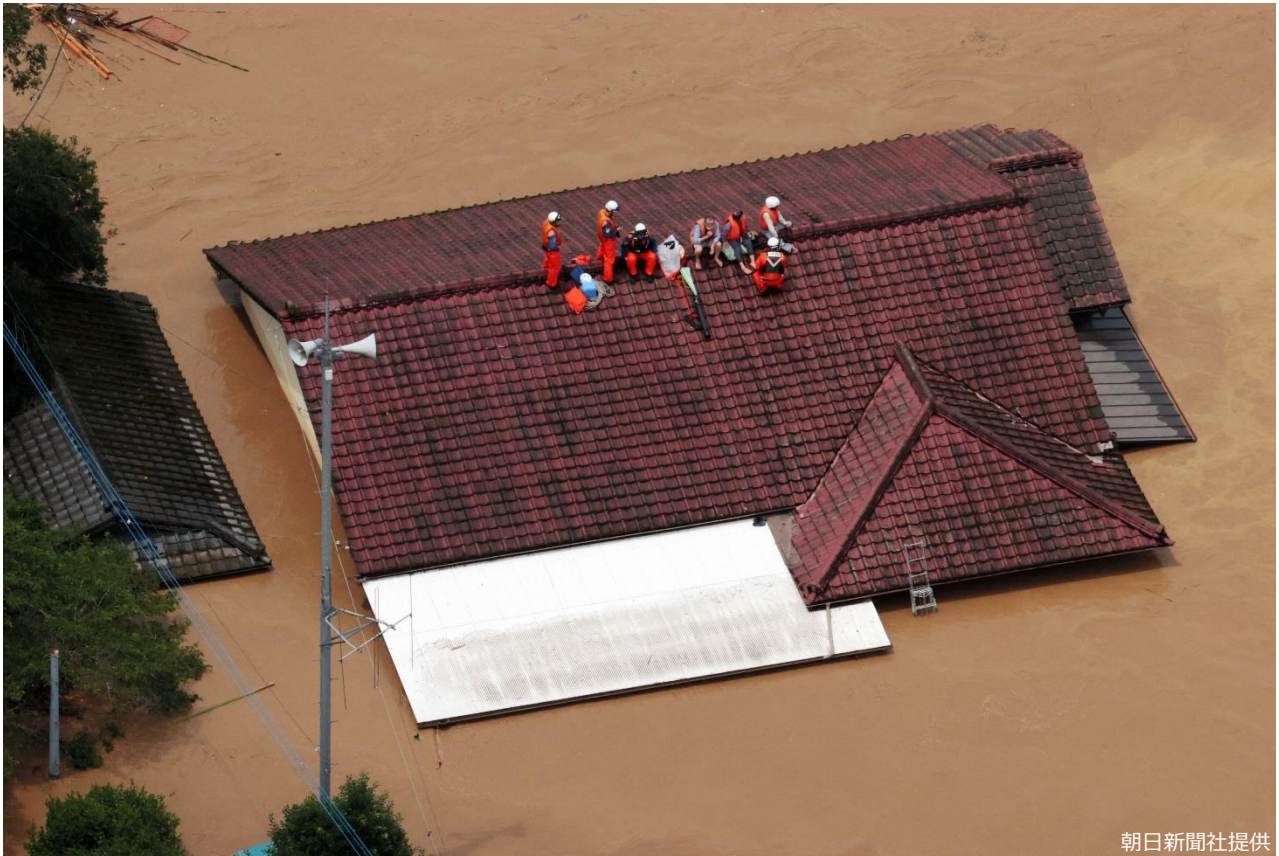
そんな中とても救われたのが支援物資の存在であった。日が経つにつれ量も確保され、種類も豊富になっていき、日用品に困る事もなくなっていった。少しずつ実施していた自宅の清掃も落ち着き、月日の経過と共に電気と水道が復旧し、なんとか家族が避難施設を退く前に必要最低限の生活環境の確保は間に合った。

月日は流れ、消防庁舎の復旧は完了し、普段の通勤ルートも所々片側通行ではあるが、以前の状態に戻りつつある。自宅の復旧についても

年内に完了することができ、温かい年越しを迎えられそうである。

7月4日、奇しくもこの日は結婚記念日であった。何もなければ、予約していた店でお祝いをして、楽しい時間を過ごすはずであったが、色々な意味で忘れられない日となった。災害により、予約していた店も含め多くの建物が被害を受け、今もなお復旧活動は続いている。

最後に、今回の7月豪雨災害により亡くなられたすべての方々のご冥福をお祈りするとともに、災害に遭われたすべての方々の1日も早い復興を願っています。



朝日新聞社提供

(屋根の上に避難している状況)

「あの日あの時できた事」



中央消防署消防第2課
救急室
消防士長

岡本 翔太

初めに、7月4日の明け方から活動を開始し、球磨村渡地区で6カ所の現場を転戦。そして最後に、千寿園の救出活動へと向かうまでの活動を手記に残す。

降り続く雨が、また一段と強くなり始めた頃、球磨村渡地区の避難誘導のため、ポンプ車と救急車で出動する。球磨村渡地区到着時には、球磨川の増水に伴い、掃けきれない内水で道路が冠水し始めていた。これまでも、渡地区は大雨の際に内水氾濫を経験している集落で、危機感から多くの住民が高台にあるお寺や総合運動公園に避難を開始していた。しかし、過去の経験が仇となり、「ここまで水が来たことはない」と自宅に残り避難をしていない住民もいた。想像以上の浸水速度に焦りを感じながら、避難誘導を行っている中、救助要請の無線が入った。

ポンプ隊と連絡をとり、集合場所の国道沿いのローソン球磨村渡店駐車場に到着した時には、どこが道路か区別がつかないほど冠水しており、渡地区に入って数十分間で光景は一変していた。中央署よりボート（定員4名）と船外機を積載した別部隊が到着し、別部隊の隊長の指揮の下、隊長以下3名で現場①の救出に向かおうと試みるが、水流が速く、船外機と手漕ぎでは対応できない状況であった。救助に向かえない絶望感に浸る間も与えないほど、浸水速度は増し、道路の冠水範囲も広がり、集合場所に

も水が迫っていた。

今救える住民を一人でも多く避難させるため、車両での移動を断念。車両4台に機関員を残し、本職を含め隊長以下6名で徒歩による住民の避難活動を再開する。避難誘導再開直後、避難していた住民より救助を求める声。すぐに、ボートの準備と現場②に向かう隊に分かれて活動する。現場②到着時、すでに水深は1mを超え、要救助者1名が住宅の軒下で、胸まで水に浸かり身動きがとれなくなっていた。要救助者までの距離は20m程度、現場付近の水流は緩やかであったため、本職と隊長の2名で泳いで救助に向かい、隊員1名を安全管理及び通信役として残す。要救助者と接触後、隊長のライフジャケットを要救助者に装着し、本職と隊長の間に要救助者を挟む形で救出する。

救出後休む間もなく、現場②よりもさらに50m程離れた2階建て住宅の2階で、救助を求める住民を目視にて確認したため、再度、本職と隊長は、泳いで現場③に向かった。現場③到着時、1階部分は完全に水没していた。現場③には小学生の女の子を含む要救助者3名。このままでは、さらなる水位の上昇が想定されたため、2階部分にこのまま残るのは非常に危険な状態と判断。しかし、小学生の子供と共に、泳いで避難することは困難で、ボートでの救出以外に方法はなく、ボート隊を待つことしか無かった。救出に向かう際に、通信機器は水没を避けるため携行しておらず、通信役の隊員と交信する術は、肉声のみ。通信手段が限られた中での活動で、刻一刻と水深と水流が増していく状況に焦りと苛立ちはあったが、『絶対に助けるんだ』という信念が私たちを支えていた。この時、ボート隊の状況を把握する術はなく、途中で要救助者を発見し、救出活動中であったため、到着が遅れていたことを後に知った。ようやく、ボート隊が到着し救出が完了した時には、周囲に見える住宅は2階部分のみで、平屋建ての住宅は、屋根が微かに見える程度であった。

中央署へ帰署するよう指示が入り、周辺に逃

げ遅れがないことを確認して車両待機場所へと戻る途中、遠くから声が微かに聞こえてきた。その声のはるか先、屋根の上で体を寄せ合う3名の要救助者が必死で助けを求めている。すでに上流から大量の漂流物が住宅に堆積しており、いつ崩れてもおかしくない状況で、あと数m水位が上昇すると、濁流にのみ込まれるという危機的な光景であった。私たちの装備では到底、救出できないほど状況は悪化し、ただ声をかけることしかできなかった。『どうか、持ち堪えてほしい』と切望しながら、その場を離れるしかなかった。

そんな状況の中、国道下の集落に数名の住民を発見したため、急いで現場④の避難誘導にあたった。その集落は、危機的状況が差し迫っていることに気付いておらず、避難していない住民が多数見られた。8名の住民を、浸水の危険性がない国道上まで避難させ、国道上に避難していた数台の車に、現場④の住民を一緒に乗せてもらうように依頼した。その際、車で避難してきた住民から人吉方面も道路が冠水し、国道を通行することができないと聞いたため、本職を含め住民などは国道上に孤立していることが判明した。この時、最初に集合したローソン球磨村渡店は完全に水没し、道路から6m程高いローソンの看板の上部が見え隠れするほど、水位は上昇していた。

降り続く雨の中、今後の活動方針を検討していた時、普段なら木々が生い茂り見えないはずの、対岸に位置する人吉市大柿地区が見えることに気付いた。すると、今にも流されそうな住宅の屋根に、見覚えのあるオレンジ色の合羽を着用した人が数名。また、その下流の住宅の屋根にも、同じように数名確認できた。それはまさに、当本部の職員で、今にも濁流に飲み込まれそうな光景に言葉を失い、同僚を失うかもしれない恐怖が込み上げてきたのを鮮明に覚えている。

そんな中、避難住民から救助要請があり、自分を奮い立たせながら、現場⑤へ向かった。現

場⑤は、球磨川沿いに面しており、深い所で水深1m程ではあるが、現場②、③よりも流れが速い状態であった。そのため、救出時にボートの安定を図るため、本職と隊員1名で誘導ロープを保持する。要救助者2名の救出完了後、隊員をボートで迎えに行った際、轟音とともに近くの電柱が誘導ロープを保持する隊員の方へ倒れ始めた。球磨川沿いの斜面が削られ、電柱が傾き始めたことで、芋づる式に電柱が引っ張られたことが原因であった。幸いにも電柱が完全に倒れなかったこと、すぐに退避できたことで事なきを得たが、重大事故につながる場面であった。長時間の活動と張り詰めた緊張感の中で、高い安全管理意識を保つことの難しさを再認識し、意識的に注意喚起を行いながら活動を行った。



(道路上に倒れた電柱)

雨は小康状態であったが、球磨川の勢いはとどまることを知らず、上流のダムが緊急放流をするとの緊急放送が流れてきた。『ここで、これ以上水位が上昇すると、屋根に避難している人達はどうなるのか』と、最悪な状況を想像した。被害状況を把握する術もなく、今自分たちにできることを必死に模索し、1人でも多くの命を救うため、活動範囲を広げボートによる捜索を実施した。捜索の結果、孤立状態の集落が点在していたが、住民は高台に避難しており、要救助者は確認できなかった。時刻は12時を回り、活動開始からすでに6時間以上が経過し、雨は上がり晴れ間が見え始めていた。上空にはヘリが飛びかい、本格的にヘリによる状況把握

と救出活動が始まっていた。



(ヘリによる活動状況)

水位も徐々に下がり始めたため、渡地区の屋根で救助を待つ3名の救出へ向かう（現場⑥）。水位は下がってはいたが、依然として流れが速く容易に近づける状況ではなかった。ヘリによる救助を要請するも、順番待ちの状態、3名の要救助者の疲労はピークに達しており、早急に救出が必要な状態であった。隊長とボートでの進入ルートを入念に確認し、本職と隊長でまずは住宅への接近を試みる。なんとか住宅へ移ることができたが、漂流物が堆積しており、足場も不安定な状態で、要救助者を介添えしながら救出するには困難な環境であった。そのような状況で、あの雨が嘘のように天候が一変し、日差しが強くなり、瓦が焼けるように熱くなっていた。素足であった要救助者は、熱傷により自力歩行を妨げられ、より救出を困難なものにしていた。一人ひとりをロープで確保しながらゆっくりボートへと救出し、2名を救出した頃には、今にも倒壊しそうな住宅が姿を現し、不気味な轢音が聞こえ始めていた。幸いにも辺りの水がはけ、歩いて住宅に接近できるようになったため、隊員7名での救出が可能となった。しかし、最後の要救助者は特に熱傷の程度が重く、自力歩行不可であったため、付近の漂流物をロープで結着して、簡易担架を作成し救出する。救出完了した頃には、時刻は15時を回っており、活動開始から9時間が経過していた。



(屋根上に避難している要救助者)

長時間の活動で飲料水も底をつき、中央署から届いた支援物資を補給しながら、災害に対する日頃の備えを改めなければと感じていた。一時の休息もつかの間、突然のサイレン音に目をやると、国道上を走行する緊急車両・・・千寿園へ向かうため立ち上がった。

今回の「令和2年7月豪雨」は、国土地理院の洪水浸水想定区域と重なる地域での災害が多く、多くの救助事案は早期避難できていれば防ぐことができたため、「災害が起きる前に避難する」ことの重要性を再認識した。消防の限界を経験し、後悔と反省だけで終わらせることなく、本災害の記憶を後世に伝え、今後起こり得る未曾有の災害に立ち向かうための糧にしていかなければならない。そのためにも、自助、共助を最大限に活かすため、地域住民に対するソフト面の充実を図る必要があり、私たち消防が一端を担っていかなければならないと強く感じた。

1 各所属職員の手記

「忘れず語り継ぐために」



中央消防署消防第3課
総合管理室
消防副士長

高田 健志

私の住んでいる球磨郡球磨村神瀬は、球磨川の支流のひとつである川内川沿いに集落が立ち並ぶ地区である。少子高齢化、過疎化が進む中、伝統文化を重んじ伝承し、そして地域交流が盛んに行われ、住民同士の密接な関係性が強い地区だと思う。

発災前日、私は勤務明けで、いつも通り家族揃って夕食を囲い、就寝した。7月4日の未明に雨音で目が覚め、カーテンを開けて窓の外を見みると雨は降っているものの避難するという考えはその時点では皆無だった。午前3時を過ぎた頃、大粒の雨が降り続き、防災無線からは「観測所の水位が氾濫危険水位を超え避難指示緊急が発令された。」との放送が鳴り止まなかった。ただ事ではないと妻と子供を起こし、近所の第一避難所である神瀬地区多目的集会場に避難させた。「降りしきる雨により、自宅近くは膝下まで水がきていた。」自宅前は水が溜まりやすい地形となっているため消防団と協力し、小型ポンプを使い排水作業を行っている、消防本部通信情報課から、「国道沿いに停車中の車両内に取り残されて逃げられない方がいるとのことで確認して欲しい。」との連絡が入った。自家用車で向かうが、自宅から人吉方面は土砂崩れが発生し、目的の場所にはたどり着くことが出来ない状況だった。該当車両を確認できないまま引き返せざるを得ない状況に悔しかったのを覚えている。

自分が今できることは何か。避難すべきなのか。家々を回り避難を促すべきか。この暗闇の中、危険を顧みず活動すべきか多くの葛藤があった。ますます水位は上昇する一方だったので、少し高台の球磨村森林組合に身を寄せていた。そこで妻と連絡を取ると、涙ながらに「避難している集会所は浸水してきて、胸付近まで水に浸かりながら近所の2階建ての家に移動した。」というのだ。2階建ての住宅には私の家族含め、17人が取り残され孤立している状況をその時初めて知った。「浮くもの、浮くもの」と皆が言っているとのことで、機転を利かした消防団の方から神瀬保育園にあるプール（幅：約1.7m、長さ：約4.6m、重さ：約50kg）を持ってくるように指示を受けた。そして、浮かせてみるとバランスは悪いものの乗り込むことができた。ロープを渡し、ロープを伝いプールに2、3人ずつ乗せて神瀬保育園側にピストン搬送した。17人を搬送し終わると日が明けていた。



(簡易プールを使用しての救助)

ふと周りを見渡すと濁った泥水が住宅を飲み込んでおり、あの光景は今でも脳裏に焼き付いて離れない。その後は、バルコニーで手を振り救助を待っている方のところや足が不自由で2階に残ったままの方のところへ物干し竿を使い地面を突きながらプールを少しずつ進め、バルコニーや軒部分にプールを着けて救出した。皆さん口々に感謝の言葉を伝えられた後に「ここまで来るとは想定していなかった。」との言葉が印象に残っている。

救出が一段落して神瀬保育園に行ってみると約70人、乗光寺に50人ほどが身を寄せられていた。備蓄品で食料を賄うことができるのが2日分しかない、早急に薬が必要な方が多数いる、安否確認したいが連絡手段がない等、ほとんどの方が着の身着のまま避難されている状況だった。コロナ禍の中で密にならないように避難者をどのように対応すべきなのか、また、現状をどのように把握していけばいいのか保育園の先生方や、避難住民全員が混乱している状況だった。



(球磨村神瀬地区)

翌日、日の出とともに午前6時半から、自衛隊ヘリで8名持病のある方を優先して救助してもらい渡地区のさくらドームまで搬送することとなった。私は、消防団数名と共に川内川上流の上原、松野、四蔵、永椎、日当、大岩地区まで安否確認と道路状況を見に徒歩で行った。普段道であるところが大量の土砂で埋まり、普段川であるところを歩いて道なき道を上流地区へ向かった。



いつも通りだと20分もかからない一番上流の大岩地区まで約3時間かけて向かったのを思い出す。家屋の倒壊や流失、土砂の流入はあ

ったものの幸いにして死者や負傷者はでなかった。最初に話したとおり消防団が中心となり、住民同士の関わりが強かったからだと感じた瞬間でもあった。

それから数日が経ち、自衛隊車両が通行できるようになり、子供たちと妻は一足先に神瀬地区を出て、芦北町へ向かうことが出来た。今まで我慢していた感情が爆発したのか妻との別れの時は、声が震えていたのを覚えている。普段の何気ない日常がどれだけ幸せだったか、家族と一緒にいられない寂しさもこみ上げてきた。私は、災害発生5日後に親戚に迎えに来てもらってやっと神瀬地区をでることが出来た。

最後に、私自身この水害を経験し自然の驚異を身に染みて感じる事となった。いざ水害が発生した場合、浸水することはハザードマップ上に示してあるにも関わらず、人はなぜ早期避難をしないのか。今回、皆さんが言われていた「ここまで来るとは想定していなかった。」との言葉が今でも頭をよぎる。では、なぜ河川が氾濫する以前に避難しないのか。確かに私自身、堤防を越水し住宅を飲み込むなんて思ってもいなかった。しかし、行政は防災無線を活用し、段階的に避難を促されていた。人を動かすのは確かに難しいことだと思う。私は、早期避難の重要性を地域住民に講話や啓発活動を通して積極的に訴えていくとともに、自らの経験談、そして人との関わり的重要性を後世に伝えていくべきだと今回の水害で学んだ。

水害発生時の救助活動はわたし一人では到底できることではなく、地元消防団との連携した活動が不可欠だった。連携し協力した活動があったからこそ、災害活動だけでなく、早期の住民の安否確認と情報共有に繋がったと確信している。消防団の皆様には、ご自身も被災されている中、家族のそばに居たい気持ちを抑え、「地元のために」との気持ちで活動されたことに頭が下がるばかりだ。この令和2年7月豪雨を教訓に今後とも消防団または行政と密に連携をとりながら、消防業務に邁進していこうと思う。

1 各所属職員の手記

「7月豪雨災害を経験して」



中央消防署東分署
消防副士長

前村 尚幸

令和2年7月4日04時26分、非番召集の連絡を受ける。急いで準備を整えながら、まだ寝ていた家族を起こし、実家に避難するよう促す。心配そうにこちらを見ている家族を横目に、荷物を車に載せ家を出た。外はまだ真っ暗で、雨もまだ激しく降っていた。

私は分署長とともに東分署に残り、駆け付けて助けを求める住民や、電話の対応をした。空が明るくなりはじめたころから、次第に通報が増え始めた。災害の大きさを測りかねていたが、想定外の事態が起きている事だけは理解できた。毎年日本各地で多発する大規模災害を、ニュースや新聞などで見ていたが、まさか私の住む町が被災するとは思ってもみなかった。

正午を過ぎたところに、職員100人分の飲料水と食料を確保し中央消防署まで届けるよう下命された。指示通り100人分の飲料水と食料を確保し中央消防署へと向かった。錦町から人吉市に入ったあたりまでは、渋滞していたものの道路状況は悪くなかった。しかし、織月大橋に差し掛かった時、目を疑った。織月大橋上には泥が堆積しており、欄干には流木が幾重にも重なり引っかかっていた。さらに衝撃的だったのは、西瀬橋の一部が流失していたことだった。そこで私ははじめて今回の被害の大きさと深刻さを認識した。

中央消防署に到着し飲料水と食料を降ろした後、球磨村で活動中の隊員へ飲料水を届ける

ため出発した。隊員たちは夜明け前に出動した後、十数時間もの間、不眠不休での活動を余儀なくされていた。いずれの隊員も疲労感が露になっており、災害活動の厳しさを容易に察することができた。

その後、20時頃から中央消防署にて救急隊に編成され、特別養護老人ホーム千寿園から避難してきた入所者を医療機関へ搬送した。搬送しては避難所へ戻り、またすぐに次の避難者を搬送ということを繰り返した。気が付けばいつの間にか日付が変わっていた。救急搬送を終え帰宅できたのは、7月5日02時過ぎであった。

この度の豪雨災害で当消防本部管内の至る所で氾濫や浸水による被害が出ていたが、特に被害が大きかったのは人吉市と球磨村であった。我々が勤務する消防署も被災した。人吉市下林町に位置する中央消防署は1階が床上浸水し、出動車両を含め実に27台もの車両及びバイクが水没した。圧倒的な自然の力を目の当たりにして、災害の恐ろしさを痛感し、そして消防力の限界を感じた。

今回の豪雨災害での経験を忘れることなく、また起こらないとも限らない災害に備え日々精進したい。

最後に、ご支援いただいた全国の皆様に心からお礼を申し上げますとともに、豪雨災害で被害を受けた全ての方に、心からお見舞い申し上げます。

1 各所属職員の手記

「豪雨災害の恐怖」



中央消防署西分署
消防副士長

福本 武流

7月4日04時過ぎ、自宅で家族と就寝中に、「非常召集です。西分署（球磨村）までの道路が寸断されたため、中央署（人吉市）に参集すること」と西分署長から電話が入った。

私は慌てて布団から飛び出し、急いで活動服に着替えた。寝ていた妻を起こし、「召集がかかった。災害が起きるとしばらく家に帰れないだろうから、子どもをよろしく」と伝え、車に乗り込んだ。

中央署へ登庁すると参集している署員が騒然としており、深刻な事態であることを改めて実感した。

中央署員は、すでに警戒広報及び避難誘導に出動していた。しかし、広範囲の出動要請に人員が追いつかず、私も出動の命令を受けた。

出動場所は、球磨川の支流である福川と御溝川の合流地点に架かる薩摩瀬橋だった。現場は、支流から溢れた水で道路が冠水し、水深はふくらはぎの高さまで達していた。

私達はすぐに付近の住民に避難を呼びかけ、集まった人々を次々とボートへ乗せた。その数は十数名にも及んだ。安全な場所まで搬送するため、来た道を引き返していると、腰の高さまで水が押し寄せて来た。

その時、水深が深い方へ歩いていく男性がいたため呼び止めて、「そちらは危険です、一緒に避難しましょう」と声を掛けた。しかし、男性は「私の家はそこだから」と5階建てのマンシ

ョンを指差した。隊長にそのことを報告した後、徐々に増える濁流の中、自宅まで送り届けた。



（民家屋根に避難する隊員）

自隊に戻ろうと冠水した道路に入ったが、胸の高さほどに水位が上がり、流れも速く身動きが困難となったため引き返し、マンションの屋上へと避難した。

その時、遠くから叫び声が聞こえ、下を覗くと男性2名と高齢の女性が乗った手漕ぎボートが、濁流の中を流れていった。ボートはマンションを過ぎたところで転覆し、乗っていた方は濁流の中に投げ出されてしまった。

女性は必死にもがいていたが、電柱などに掴まることも出来ずに流されていたため、すぐに助けなければと思い、急いで階段を駆け下りた。しかし、1階部分は水没し外に出ることができなかった。私は、「近くのものに掴まって！」と何度も叫ぶことしかできなかった。

すると、一緒に投げ出された男性が女性を捕まえて、流れが緩やかな方へ泳いでいき、立木に掴まった。男性の咄嗟の判断がなければ、女性は助かっていたいなかったかもしれない。安心する気持ちの一方で、消防吏員として人の生死がかかっている状況で何もできなかったという自責の念に駆られた。

それからしばらくは成す術がなく、水が引くの待ち、先程の女性を保護し救急隊へと引き継いだ。その後、周辺の被害状況を確認しながら

ら、徒歩にて中央署へ向かっていたところ、被災した御遺体を発見し、警察官と協力して警察車両へ収容した。帰署したのは15時過ぎで、出勤から約8時間が経っていた。

帰署後も様々な活動が続き、この日が勤務日だった私は中央署で翌朝まで勤務し、翌日は中央署の復旧活動を行い自宅に帰った。

時刻は19時を回っていたが、妻と子どもが不在であったため連絡すると、熊本市内の妻の実家へ避難しているとのことだった。勤務中も家族の安否が気になりだったが、無事を確認できた瞬間は安堵した。

災害発生から数日が経ち、浸水した西分署の復旧作業をしながら、球磨村コミュニティセンター清流館の一角を借りて消防業務を行っていた。

そこには、昼夜を問わず活動をする役場職員や消防団員、自衛隊員の姿があった。



(球磨村コミュニティセンター清流館の様子)

役場職員や消防団員の中には被災している方もおられ、家族や友人、家の状態などが心配なはずだが、球磨村のため、地域住民のために全員で協力し助け合う光景が、私の心に深く突き刺さり、一人では災害に立ち向かえない、全員で一致団結してこそ乗り越えることが出来るのだと改めて実感した。

私は、この災害で体験したことを生涯忘れることなく、これからの消防人生を全うしたいと思う。

最後に、この災害により被害を受けられた方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

「令和2年7月豪雨記録」



中央消防署中分署
消防士

高野 諒平

令和2年7月4日、未曾有の水害が人吉球磨地方を襲った。今こうして活動手記を残すことになったわけだが、あの時の出来事を振り返ると、改めて今回起こった水害の恐ろしさを実感する。その当時を振り返り、その時の出来事や感じたこと、そして被災して思ったことをこの活動手記に記そうと思う。

水害当日、私は非番で普段と変わらない生活を過ごしていた。あの日はいつもと違う感じがし、雨音は激しくなっていき、一向に収まる心配がしなかった。それから、一時すると本部から非番召集がかかった。私は、相良村にある中分署に向かった。その道中暗くてあまり分からなかったが、すでに川は氾濫し道路にまで水がきていた。なんとか無事に中分署に着き、役場や本部との情報共有、道路状況調査、救助・救急活動を行った。その中では、水害の現場に行くこともあり、そこには今まで見たことのない光景があった。氾濫した川の水位は胸あたりまで浸水しており、周囲にあった民家や田畑はすでに川に飲み込まれていた。改めて今回の水害の恐ろしさを、身をもって実感した場面である。

実際に活動が一段落ついたのは、水害が起きて十数時間後のことであった。それから、私は自宅を見に一度帰宅することにした。いつもの帰り道が普段感じない寂しさと悲しさを感じた。自宅から数百メートルの所で土砂が堆積し、

それより先は車では進むことが不可能であったため、徒歩で向かうことにした。自宅付近に近くなるにつれ堆積していた土砂の深さも増し、どこから流されてきたかわからない軽乗用車が道路の真ん中に横転していた。やっとのことで着いたものの、土砂が溜まり玄関ドアが開かないような状況であった。数十分掛けてその土砂をどかし中に入ることができた。家の中は凄惨な状況であった。畳は全て剥がれ、天井は鉄骨が剥ぎ出しになり、足の踏み場もないくらいに荒れていた。これまで生活していた場所がたったの1日でここまでになるとは誰が想像できただろうか。そこにいても、ただただ呆然と立ち尽くすことしかできない自分に歯がゆい気持ちと、どこにこの気持ちをぶつけていいのかかわからないもどかしさがこみ上げてきたのは今でも忘れない。その日から数日間、仕事と被災した自宅の片付け作業に追われる日々を過ごし、同僚や家族、親戚、地域の人々の力を借りてなんとか終わることができた。

改めてこの水害を通し、多くの方々の協力や支えがあったからこそ、一人の人として、また消防吏員として今日まで来られたのだと思う。これから先の消防吏員としての人生を全うするとともに、自分は一人ではないこと、常に誰かに支えられて生きているのだという感謝の気持ちを忘れずに先に進もうと決意し、この活動手記を締めたいと思う。

最後に、この水害で亡くなられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、1日も早い復興がなされることを願っている。

1 各所属職員の手記

「未曾有の豪雨災害を経験して」



中央消防署北分署
消防士

松本 浩稔

7月4日、降り続ける激しい雨と、けたたましい警告音で避難を呼びかける緊急速報エリアメール。そして、職員メールが告げる非常召集…。私は初めて経験するこの異常事態の中、ただ事ではないことが起こるのではないかと不安を感じていた。

召集に応じ、北分署に向かおうと外に出ると、不安は現実のものとなり、球磨川左岸の高台にある自宅から見下ろすと、見慣れたいつもの光景はそこにはなかった。氾濫した球磨川の濁流が見渡す限りのすべてを飲み込み、いつも通行している西瀬橋の一部までをも流失させていた。対岸の町内では、たくさんの住民が屋根の上に避難して助けを求めているが、呆然と立ち尽くす以外何もできない状況であった。消防官でありながら、何もできなかったあの時の悔しさは決して忘れることはないだろう。

まずは北分署に向かおうと試みたが、既に道路は冠水し、もはや川となっていた。移動手段がなく、上司に状況を説明すると、自宅待機の指示を受けたため、「今できる事」を考え、自宅から確認できる状況を中央消防署や北分署に報告することとした。

その後、時間の経過と共に球磨川の水位は下がり、「これから人吉はどうなるのだろうか」という不安な気持ちを押し殺しながら自宅を後にしたのを今でも鮮明に覚えている。

北分署に到着後は、分署長から指示を受けて、

災害の対応に当たった。降り続く雨は止む気配をみせず、依然として災害発生危険性を残したまま、予断を許さない状況が続き、倒木や土砂崩れの影響で停電が発生する中で不安な夜を過ごした。

結果的に北分署管内では土砂崩れによる数ヶ所の孤立集落は発生したものの、人的被害がなかったことに、心の底から安堵感を覚えた。

発災後、現場活動が落ち着いた頃から、ボランティアに活動を移した。「水害によって多くの人命と財産が失われ、被災された方の悲しみは計り知れないだろう」と思い、少しでも力になりたいと考えたからだ。しかし、ボランティア活動を行う中で、多くの方が「1日でも早い人吉球磨の復旧復興」を願う気持ちが強く、いつまでもくよくよしてないで前に進む1歩が大切なのだと、私自身が勇気づけられた。

日頃から水害等が発生した場合、どのような行動をとるべきかを考えて自分なりに備えていたが、今回の豪雨災害は想像をはるかに超えるものだった。

近年、全国的に災害は頻発し大規模化している。今後、これ以上の災害がいつ発生するかも分からない。この水害の教訓を生かすためにも、災害に対する知識と対応能力を高め、今後の業務に努めていきたい。



(自宅から見た光景)